

執筆者紹介（掲載順）

藤井俊博（本学教授）

大山和哉（本学助教）

岩坪健（本学教授）

山本佐和子（本学准教授）

田中励儀（本学教授）

丸山健一郎（本学大学院博士課程後期課程二〇一五年度退学）

胡鴻洋（本学大学院博士課程後期課程在学）

編集後記

今号は研究論文が四本、資料紹介が三本となった。研究論文のうち三本は国語学分野で、それぞれの切り口から日本語の特性を探っている。現代の我々が使っている日本語は、太古のコトバと一続きのものであり、文法や語彙は今なお刻々と変化を続けている。研究によって明らかになる様々な地点・時点の日本語の様相を眺めてみると、「日本語のアルバム」を開くが如く、我々に過去の日本語の姿を、そして過去の日本語を使って生きた人々の姿を、ありありと教えてくれる。翻って、今、我々が使っている日本語の「頼もしさ」「有難さ」のようなのが感じられてこないだろうか。

資料紹介もまた、各資料が生成された場に思いを馳せてみれば、その背後にある人々の思いや息づかいに気付かされ、さらにはそれらを含み込むもつと大きな「文化」の存在に思い至る。その文化は、たとえ時空を隔てていようと、わたし達個人と決して無関係ではない。

もとより人文科学は、「人間」を研究する学問である。国文学であれば主として日本語に関わる文献によって「人間」を研究しているのであり、ひいては「わたし」や「あなた」にまつわる謎を解き明かすものとなるのである。様々な視点から「人間とは何か」という問いに答えを与えるような豊かな研究成果が寄せられることを今後も期待している。